受賞者の業績

吉　田　恵美子　48歳(北海道・保健婦)

昭和33年頃の和寒町は、妊婦健診の受診率わずか2パーセント、妊娠届は出生後が50パーセントという状況であった。夏は自転車、冬はスキーで、へき地の家庭訪問、巡回検診を重ね、一貫した母子健康管理で異常分娩の防止、未熟児・乳児死亡の減少に多大の功績をあげた。現在では、母子保健はもとより、乳幼児から学童の歯科保健、地区組織の育成と町民の健康管理態制をつくりあげており、今後の活躍が期待される。

渡　部　とみ子　52歳(山形県・保健婦)

山林・原野が村の面積の96パーセントを占め、山間に41部落が点在し、冬は豪雪地帯の朝日村で地域の健全育成は家庭からの理念をもって、21年間母子保健活動に献身。母子保健推進員の育成、成人病予防は乳幼児期からをスローガンに、食生活改善推進員の協力のもと、減塩運動を推進し、更に祖母学級を開設して薄味習慣のじよう成、しつけ指導、う歯予防の指導等、幅広い活動を続けている。

高　橋　ア　サ　50歳(新潟県・保健婦)

わが国屈指の豪雪地帯で、過疎化と世帯流出が続き、高齢化している川西町で32年間、母子保健事業の基盤整備と母子保健管理システムの確立に寄与。昭和26年当時は、冬期間雪で孤立している部落での自宅分娩には助産婦と共に活躍。常に研究心を発揮、卒先して技術研修に励むなど、母子保健に対する情熱は並々ならぬものがあり、その卓越した指導力は高く評価されている。

大　塚　ヨ　子　52歳(群馬県・主　婦)

昭和46年以来、南牧村の母子保健推進員として、行政と住民のパイプ役を果し、住民に密着した活動を展開するため、各種健診の受診の勧奨につとめるほか、健康展、栄養実習、体験発表などを積極的に開催。特に若い母親の孤立を防ぐため、手づくりのおやつで妊婦交流を図る等、家族の協力を得て精一杯の活動を続け、村民から厚い信望を得ている。

和　田　幸　子　43歳(台東区・保健婦)

都内の保健所、特に下谷保健所では、従来の母親学級での受講者が減少の傾向にあるため、カリキュラムを改訂し、実習を積極的にとり入れる等工夫をこらして受講者の増加を図った。また核家族化が進むなかで小児救急看護教室を開催して、事故や病気の応急手当、家庭看護の方法を実習を通じて指導し、修了後は子育てたんぽぽ会に加入させるなど、地区組織の育成に努力している。

小　宮　弘　毅　50歳(神奈川県・小児科医師)

神奈川県・小児科医こども医療センター開所と同時に、新生児・未熟児担当医長として診療に従事。わが国有数の施設として常に最先端の医療内容をもち続け、県内の新生児・未熟児の保健指導者として活躍、大都市の新生児救急システムを、地域の多数の病院から協力を得てカバーする方法をとり、全国的にも関係者から高く評価されている。平塚保健所長就任後も県内の新生児・未熟児の医療に多大の貢献をしている。

安　土　富　子　54歳(石川県・看護婦)

零細農家、織物工場が多い辰口町では、妊婦も早朝から夜遅くまで働く人が多く、異状分娩も多く、育児も祖父母が担っていた。このため、健康な母体と健やか育児推進のため、家庭と事業主の理解を得ることを目的に昼夜を問わず訪問活動を続け、婦人会組織の研修会に母子保健健康教育を導入するなど、周産期死亡ゼロ、非行少年のいない町を目指して幅広い活動を続けている。

花　井　八重子　51歳(愛知県・保健婦)

県内の保健所に21年間勤務。特に昭和46年、知多保健所常滑支所勤務当時、助産所で分娩予定の妊婦に貧血が多いことが判明、妊婦貧血教室を開催して成果をあげた。また、乳児のおむつかぶれが多いことから、妊娠中から「拭け拭け運動」を実施。乳児の股関節脱臼予防のため、出生直後から「自然肢位保護」を推進、股関節の減少に多大の貢献を異常した。

上　田　慶　子　48歳(京都府・保健婦)

大阪・京都市のベッドタウンとして開発が進み、昭和47年頃は出生率31.9パーセントと激増した長岡京市で、妊娠・出産・就学に至るまでの管理票による全乳幼児の発達管理を実施した。市民課との横割りシステムなどを図り、障害児をもれなく把握し、100パーセント収容可能にし、早期指導が可能になり、市民の信頼感も高まり母子保健活動の実績は、高く評価されている。

真　田　紀　代　44歳(兵庫県・保健婦)

猪名川町は南北に細長く、北部の無医地区は母子健康センターを中心に、南部は町役場で乳児健診を実施し、受診率常時100パーセントを目ざすとともに、育児環境の改善に寄与。また、夜間分娩の介助等産婦及び助産婦に対する援助を行い、住民から厚い信望を得ている。地形上から住民の対話が不十分な現況に鑑み、「声かけ運動」を展開、健康づくりの輪を広げるための地区組織の育成強化に努力している。

前　田　和　江　49歳(神戸市・保健婦)

神戸市の保健所で、38年間母子保健活動を続け、地域の特性から生ずる諸問題と積極的に取り組んでいる。特に永年に亘り同和地区に出張して、乳幼児に対しツ反、ＢＣＧ接種を熱心に勧奨し、肺結核の防止に努めている。また、乳幼児の健康相談、急病講習会、歯みがき指導、離乳食指導等積極的に衛生教育を行ない、同和地区の母子保健の向上に多大な貢献をしている。

芳　賀　清　子　49歳(岡山県・保健婦)

新見保健所をふり出しに26年間、へき地の母子保健の改善、幼児クラブ、愛育委員組織の育成、中小企業に働く女子従業員に対する母子衛生教育を実施し、流早産、未熟児の出生防止に貢献。また管内の全乳児の健康状態を把握するため、あらゆる健康相談等の場で活用できる発達チェック票を考案作成して、ハイリスク児の早期発見とその対応など一貫した管理システムをうちたて、きめの細かい活動を続けている。

神　本　和　美　43歳(島根県・保健婦)

県内第1号の母子健康センターが設置された三隅町で20年、妊娠中から乳児期まで一貫した健康管理を行い、貧血教室を開設し妊婦貧血の減少に努め、また異常者の発見、早期対応等適切に実施し、妊産婦死亡皆無、乳児の要注意者の減少等、着々と成果をあげている。また、愛育班の育成に努め、手造りでポスター等を作成、各種検診率の向上を図るなど不断の活動を続けている。

倉　永　志素子　39歳(山口県・保健婦)

美東町担当の保健所保健婦として勤務。その後美東町役場に転職、積極的に母子保健推進員の養成に努力した。また、各種学級を開催し適格な指導、懇切な相談等により母子保健の水準向上に寄与、特にむし歯予防に注目し、むし歯予防教室を開設して、二歳児とその母親を対象に歯ブラシとコップを配布着々と成果をあげている。また、有線放送で保健婦の時間を確保し、住民から厚い信望を得ている。

知　念　正　雄　46歳(沖縄県・小児科医師)

中部病院小児科医長として着任早々、心疾患対策の必要性を痛感し、心疾患外来を開設、精密検査、手術を手がけると同時に、専門医の少ない離島の心疾患児の検診、生活指導に取り組み、心疾患児の医療の確立、健康管理の充実に多大の貢献をしている。また、予防接種事業にも積極的に協力し住民から厚い信頼を得ている。現在沖縄県小児保健協会会長として、組織の強化発展に努力している。